

インストラクショナルデザイナーは教科内容の専門家とどのように関係を構築すればよいのだろうか？

How Should Instructional Designers Build Relationships with Subject Matter experts?

天野 慧^{**}, 張 曉紅^{***}, 平岡齊士^{****}

Kei AMANO, Xiaohong ZHANG, Naoshi HIRAOKA

熊本大学大学院教授システム学専攻^{*} グロービス経営大学院^{**} 関西大学^{***} 放送大学^{****}

Graduate school of instructional systems, Kumamoto University^{*}

Graduate School of Management, GLOBIS University^{**}

Kansai University^{***} The Open University of Japan^{****}

<あらまし>インストラクショナルデザイナー (IDer) が、教科内容の専門家 (SME) に自分が有効であると考えた提案を受け入れてもらうには、相手と良好な関係を構築する必要がある。本研究では、関係構築のためのヒントを探るために文献調査を行った。その結果、IDer は、自分が最善と思う提案のすべてを SME にはじめから受け入れてもらうことをめざすのではなく、初期には SME に採用してもらいやすいものから提案し、段階的かつ長期にわたって関係を構築する必要があること、さらに、段階的な関係づくりの方略を検討する際に活用しうる理論的枠組み存在することがわかった。

<キーワード> インストラクショナルデザイナー, ソフトスキル, CBAM, 関係構築

1. はじめに

大学が学生向けに行っている授業や企業が従業員向けに実施している研修等で、組織全体の教育の質を底上げするために、「教える内容」の専門家である科目担当教員や研修講師といった教科内容の専門家 (SME) と「教え方」の専門家であるインストラクショナルデザイナー (IDer) が協働する場合がある。その際に、IDer は、SME が実現したいと思っていることを把握したうえで、それを具体化するための「教え方」の提案を行う。提案にあたっては、IDer は SME に単に自分の提案を押し付けるのではなく、相手の状況を把握したうえで、自分の提案を受け入れてもらえるようにソフトスキルを働かせ、関係構築をしていく必要がある。しかしながら、IDer は自分の教育設計に関する専門知識を披露することに一生懸命となる傾向があり (Richardson *et al.* 2019)、教育改善へ向けて IDer が SME と良好な関係を築けていないという課題がある。そこで、本研究では、教育の改善へ向けて、IDer は SME とどう関係を構築していけばよいのか、示唆を得るため文献調査を行った。

2. 段階的かつ長期的な関係づくりの必要

IDer を対象とした調査研究では、IDer は最初からすべての提案を SME に受け入れてもらうのではなく、長期的な関係を築く必要性が指摘され

ていた。例えば、根本ら (2023) は、他者としての SME の教育改善を担う IDer 養成講座の効果を検証し、SME が授業で実現したいと考えていた「思い」に寄り添った提案を IDer が行っていく方略の有効性を示した。その上で、IDer が最善と思う提案でも、SME の状況によってすべてが採用されるのではなく、取り入れやすいものから採用される傾向にあるということを示し、「まずは受け入れてもらう関係を作った上で、より負荷が高い改善を長期的に支援していくこと」(根本ら 2023, p437) の重要性を指摘した。

また、Mueller *et al.* (2022) は、IDer と SME にインタビュー調査を行った結果、SME との関係構築を成功させるための方略の一つとして、設計の提案プロセスでは、最初の提案では完璧を求めず、一口サイズの改善提案を重ね、長期的な関係性を構築することの有効性を指摘した。

3. 段階的な関係づくりを検討するための枠組み

では、どのように関係づくりを段階的に進めればよいのか。相手に応じた提案のプロセスは、①提案に対してどう反応するかといった SME の状態を把握し、②その状態に応じた提案を行うという2つ手順に分解できると思われる。これらの2つの手順を段階的に検討するのに有用であると考えられる理論的枠組みについて調査を行った結果を報告する。

懸念のレベル	自己への注目			課題への注目		影響への注目	
	Stage0 認知	Stage1 情報	Stage2 個人的	Stage3 管理	Stage4 結末	Stage5 協働	Stage6 再注目
SMEの状態	提案について全く気にかけていない	提案がどんなものかをさらに知りたい	提案の採用が自分に与える影響、メリットを知りたい	関連情報収集に多くの時間を費やしている	提案の採用が学習者に与える影響を知りたい	提案の採用が他の教員に与える影響を知りたい	もっとうまく応用する方法を知っている
対策の例	提案がどんなものか、SME個人にとっての利点を伝えたり、その活用計画をともに作成したりすること		取り組み方法の例示、その活用練習と訂正的フィードバックの提供		他SMEの指導や会議での成果発表等、取り組みの共有機会を与えること		

図1 CBAMの段階

注：Hall & Hord(2019)の P108 における各段階の定義と P374-377 の対策に関する記述をもとに筆者が図にまとめた

3-1 SMEの状態を分析するための枠組み

SMEの状態を把握するための理論的枠組みとしてCBAMが挙げられる(Hall & Hord 2019). このモデルは、学校に新たなICTツールを導入する等の教育変革の際に、SMEに変化を求める提案に対して彼らがどんな懸念を抱くかを段階的に示すもので、段階に応じた対策を提案している(図1). このモデルを参照することで、SMEがどんな状態で、どんな段階にいるか把握することが可能となる.

3-2 提案の内容・仕方を検討する枠組み

IDの第一原理を提案したMerrill(2020)は、どこから教育改善に手をつければよいか不明の場合には、レベル0の情報提示のみの教授方略を最下層のレベルとして、例示(レベル1)、練習(レベル2)、問題中心(レベル3)の順で足りない要素を足して、教え方のレベルを上げていくこと、また、各レベルで活性化や統合の要素を加えることで、学習の効果を高めていくことを推奨している(図2). IDerがSMEに対して、どんな内容を段階的に提案すればよいかを検討する際に目安となる枠組みだと思われる.

4. 考察とまとめ

本研究では、文献調査を行った結果、IDerはSMEに教育改善の提案をする際には、最初から

完璧を求めすぎず段階的に教育改善の提案を行い、長期的な関係を構築する必要があること、そして、その検討に有効な理論的枠組みがあることが確認できた. 今後、実際にSMEと協働しているIDerにインタビュー調査

を行い、IDerはSMEとどのように関係を構築していけばよいのか、知見をさらに深めていく.

謝辞

JSPS 科研費 24K06262 の助成を受けた.

参考文献

Hall, G. E., & Hord, S. M. (2019) *Implementing Change: Patterns, Principles, and Potholes (fifth edition)*. Pearson

Merrill, M.D. (2020) *First principles of instruction (Revised ed.)*. Association for Educational Communication and Technology

Mueller, C.M., Richardson, J., Watson, S.L. et al. (2022) Instructional Designers' Perceptions & Experiences of Collaborative Conflict with Faculty. *TechTrends* 66: 578-589

根本淳子, 竹岡篤永, 高橋暁子, 市川尚, 鈴木克明 (2023) 上級インストラクショナルデザイナー向けの講座開発. 日本教育工学会論文誌, 47(3): 427-439

Richardson, J.C., Ashby, I., Alshammari, A.N. et al. (2019) Faculty and instructional designers on building successful collaborative relationships. *Educational Technology Research & Development*, 67:855-880

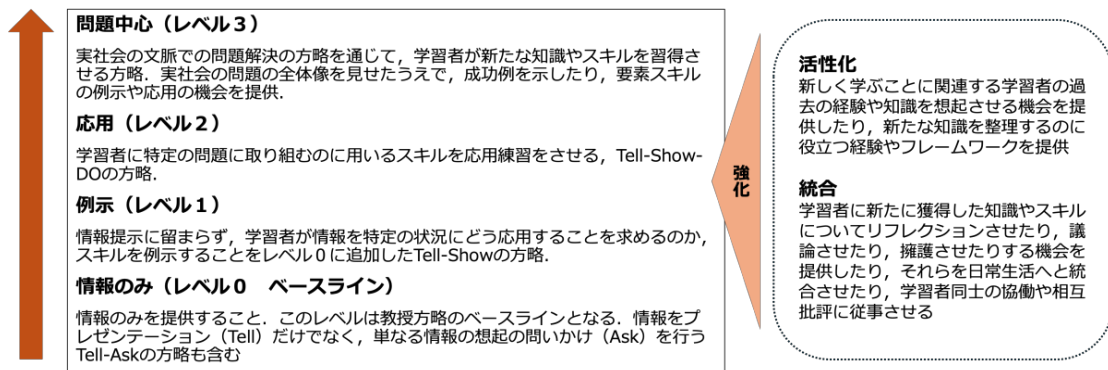


図2 教授方略のレベル

注：Merrill(2020)の P4-11 の記述を筆者が図にまとめた